



子どもの本や、子どもの読書活動の県内外の情報をお届けします！
山梨県立図書館 TEL055-226-2586 <http://www.lib.pref.yamanashi.jp/>

～ 県内外のニュースから ～

子どもが選ぶ文学賞

子どもが支持する本を子ども自身が選ぶ文学賞というと、フランスで行われている「高校生ゴンクール賞」が有名ですが、日本には栃木の「うつのみやこども賞」、大阪の「箕面・世界子どもの本アカデミー賞」等があります。

宇都宮市では市立図書館と民間団体が協力して1987年から実施しており、小学生の選定委員がその年に出版された本から「友だちにすすめたい本」を選んでいきます。箕面市では実行委員会が主体となって2010年度から実施しており、学校司書がノミネートした本に子ども達が投票して賞を決定します。本の主人公に贈られる主演女優賞など部門賞があるのが特徴です。

自分達で選ぶことで、本に対する愛着も深まることでしょう。

参考：国立国会図書館、箕面市、宇都宮市図書館のwebサイト

子どもの読書活動指導者 養成講座 報告

今年度から山梨県立図書館が始めた通年講座の第1回が、9月21日(火)ぴゅあ総合で開かれました。講座には50名以上の方から申込みがあり、定員を上回ったため残念ながら何名かの方にご遠慮いただきました。

第1回出席者は40名。山梨県立図書館の清水澄館長が「子どもの読書と子ども読書支援センターのめざすもの」と題してお話をいたしました。新館での新たなサービスに期待が高まります。

気になるトピック ○うちどく(家読)○

学校の始業前の時間を利用した朝の読書「朝読」が始まってから22年。読書の習慣がつくだけでなく、子どもの気持ちが落ち着くということで全国に広まっています。こうした読書の良さを家庭にも取り入れようと、出版取次(株)トーハンが提唱したのが「うちどく(家読)」です。茨城県^{だいご}大子町では2007年度から「うちどく(家読)推進事業」を始め、町内の指定された小中学校で家読専用の本を購入したり家読通信を発行するなど、環境整備と意識の高揚を図っています(詳細は「うちどく実践ガイド」*参照)。2009年10月には佐賀県伊万里市で家読サミットが開かれ、読書の大切さと自治体の連携を再確認しました。

■ 家読するとどうなるの？

子どもだけでなく親も読書に親しむことで、共通の体験が増え家族のコミュニケーションが深まると期待されています。同じ本を読んで感想を話したり、それぞれが読んだ本をすすめたり、方法はさまざまです。家読のためのブックガイドや、家族の読書記録をつける「うちどくノート」がうちどくホームページ*からダウンロードでき、「どういう風にすればいいかわからない」という方も気軽に始められます。

■ 家読の約束 …子どもたちが考えた約束です。これらを参考にして家読を楽しみましょう。

- ①家族で同じ本を読もう！
- ②読んだ本で話そう！
- ③感想ノートをつくろう！
- ④自分のペースで読もう！
- ⑤家庭文庫をつくろう！



* 家読(うちどく)公式ホームページ http://www1.e-hon.ne.jp/content/uchidoku_top.html

参考：朝日新聞夕刊 2010/1/26 記事、山梨日日新聞 2008/10/22 記事、大子町 web サイト



絵本いっぱい 本屋さん 【絵本屋 あんな】



今年で開店から3年を迎えたという絵本屋さんを訪ねました。

店内は木の家具で落ち着いた雰囲気。絵本好きな大人のお客様が多いそうですが、一人で来ても親子で来てゆっくりできます。

老若男女、誰でも本に興味を持ってもらえればと、絵本から一般書まで店長さんが選んだ「目にして楽しい本」700冊ほどが並んでいます。昔ながらの絵本、最近活躍している作家の絵本、外国語絵本のほか、仕掛け絵本や布絵本、ポストカードなども販売しています。

大型書店のように多くの本を並べることはできないけれども、すたれない絵本を選んでいきたいとお話ししてくださった店長さん。本への愛情を感じました。カフェもあり、調理場の音を聞きながら絵本を見ていると、家にいるような気分になってきます。

お休みの日はホームページから確認できます。

営業：午前11時～午後7時

所在地：南アルプス市野牛島 2347-1 *信玄橋から西進

電話：055-285-3245

URL：<http://www.amy.hi-ho.ne.jp/annahon/>



「1ねん1くみ」シリーズの著者

後藤竜二を悼む ～子どもたちへの思い～

● 児童文学作家になるまで

参考：『北海道児童文学全集』第七巻（立風書房、1983）解説

1943年 北海道美唄市に生まれる。五人兄弟の次男で、両親は開拓農民の末裔だった。

1954年 台風15号により農作物が壊滅。そのことが後の表現方法に影響する。

1959年 高校時代は剣道に専念するが限界を感じ、「ものを書く」という未知の世界に憧れを持つ。

1962年 早稲田大学文学部入学。早大童話会の後身「少年文学会」に入り、授業には出ず一日中本を読む。

1966年 職を転々とするが、「自分自身の砦となるような世界を」というような気持ちで書いた『天使で大地はいっぱいだ』が講談社児童文学新人賞佳作に入選し、児童文学に専念するようになる。

● 物語を通して伝えなかったこと

「子どもと読書」（2002.9-10号 no.335）で「後藤竜二の作品世界」が特集され、作品リストに79タイトルが挙げられていますが、故郷を題材にした作品・思春期の子どもを主人公にした作品・歴史的テーマを扱った作品に大きく分けられます。そのうち『12歳たちの伝説』『尼子十勇士伝』について見てみましょう。

『12歳たちの伝説』（新日本出版社、2000） 5人の小学校6年生の視点を通じ、ごく普通の子どもの内面が語られる。本当の意味で子どもに寄り添うことのできる先生の存在もあって、子どもたちは自分の力で学級崩壊後のクラスの雰囲気を変えていく。思春期の心の闇をもっと話し合ってもいいのではという著者の考えが表れた作品。全5巻。

『尼子十勇士伝』赤い^{かぜ}：旋風編（新日本出版社、2010） 時は戦国、出雲の尼子晴久が身内の新宮党に謀反の罪

を着せ壊滅させた。幼なじみをなくした山中甚次郎は〈鹿〉と呼ばれ、尼子氏の下でお馬番組となる。敵は誰なのか、守るべき国とは何なのか、疑問を持ちながら戦い続ける〈鹿〉の姿を描く。無名の民衆の歴史を伝えたいという思いが込められた作品だが、著者が亡くなったため未完。

「現象を貫く本質は具体的な現実の姿の中にしかない」。後藤氏は物語のテーマに関連する本を読みふけり、実際に各地の学校へ足を運びました。登場人物が物語の中で懸命に生き、読み手に力を与えるのはそのせいでしょう。また後藤氏は、一人称での語りが多いのは、人間の“迷い”の部分が書きやすく話し言葉のニュアンスが好きだからだと語っています。

● 子どもたちへの応援歌

子どもたちは自分で自分を乗り越えて成長して欲しい、大人たちは大人の誇らしい所を子どもに伝え、子どもを陰で支えてあげて欲しいと願っていた後藤氏は、日本各地で「子どもたちへの応援歌」と題して講演を行っています。応援歌の土台となったのは、現実生きる子どもたち自身の声と歴史の主体として生きてきた人間の声でした。子どもたちを応援する数多くの作品を残し、2010年7月、後藤氏はこの世を去りました。